九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一八六〇年代のドイツ労働運動と工場労働者（下）

小林，栄三郎

https://doi.org/10.15017/2333997

出版情報：史淵. 83, pp.1-29, 1960-12-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

一八六〇年代のドイツ労働運動と工場労働者（下）

小林栄三郎

七

一八六〇年代のドイツにかなり大規模の工場が相当に数多く存在したにもかかわらず、工場労働者の大部分はラッサール派およびアイゼナッハ派の運動にたいして積極的でなく、むしろ産業ブルジョワジーの進歩党の顕在的あるいは潜在的な地盤となっていたとすれば、われわれはその理由を当時の工場労働者の客観的および主体的条件に求めなければならぬ。しかし、さきにも述べたように一八六〇年代については史料がきわめて乏しい。わずかにクルップ工場の労働者について、調査が比較的によくおこなわれている。とりわけリヒャルト・エーレンベルクとフーゴー・ラシーヌの共著「クルップの労働者家族」（一九一二年刊）は、「ドイツ労働者の三世代の発展と発展要因」という副題が示しているように、「株式会社クルップ商会」(Die Firma Fried. Krupp Akt. Ges.) のエッセン鋳鋼工場 (Die Krupp'sche Gussstahlfabrik in Essen) の労働者のうち、三世代以上にわたってクルップに勤めている一九六家族について、比較的詳細にその状態を述べている。[註(1)] もちろん本書は会社の協力を得て調査したものであるから、資本主義的経営にたいする労働者の態度や政治的意見などは、まったく触れられていない。著者たちはまず一九〇六年十二月三十一日現在で三〇年以上クルップ鋳鋼工場に勤続している労働者六八二名について調査した結果、そのうち一九六名はその父の代からクルップ工場に勤め

ていたことが判ってきた。この一九六名について調査をつづけると、その子供たちも大部分はクルップにはたらいていることが判明し、クルップに勤めていない子供たちの状況もかなり正確に判ってきた。そこでこの一九六家族について、一八四〇年代から一九一〇年にいたるまで、三世代にわたる発展を跡づけることができたのである。残りの四八六家族については、初代の状態がそれほどよくは判らない。この調査の当時に生きていた二代目が父のことをよく知らないし、特にこの調査では家族がアンケートに答えたことをそのままには信用せず、できるだけ会社保存の資料によって裏づけたり補足したりして正確度を高めようとしているのに、その会社がわの資料も欠けていたりしたからである。だから本書では、家族がアンケートに答えたものだけによるばあいは、angeblich（家族のいうところでは）という但し書きをつけている。こうして本書は調査によって得られた材料を二分し、

一、三代にわたってクルップにはたらいた、あるいは現在なおはたらいている家族に最も力をいれてできるだけ詳しく調査し、その結果それぞれの家族について小さなモノグラフィーができあがった。これが全三九八ページの本書のうち、三三ページから二八〇ページまで、二四八ページを占める。

二、残りの四八六家族については、二代にわたってしか正確な調査ができず、したがって科学的には統計的取扱いしかできないというので、三二九ページ以下に統計篇としてまとめている。[註(2)]

本稿では、この一九六家族にかんする本書の記述から、特に一八六〇年代のクルップ労働者の状態を考えてみたい。このばあい、初代の出身地が判るとよいのだが、遺憾ながら本書ではほとんど判らない。伊藤浩夫氏が「クルップ研究」（北隆館昭一九）と改題して邦訳されたものは、「ライン史学協会連盟共同研究部第四次（一九三八年）年報」という邦訳書副題の示すとおり、ナチス体制下のもので、ナチス的な偏向、とりわけクルップをベタ賞めする欠陥を示しているが、参考になる点もある。[註(3)]このなかに収められたエーベルハルト・フランケの「アルフレェト・クルップとエッセン市」には、

つぎのような記述がある。（仮名づかいなど原文のまま）――「ルール地方に於ける氏族的研究は未だ尚ほ日が浅いが、それでも既に、移住者の同郷性といふことがルール地方の個々の町村の人口構成に対しても――その社会的、文化的、民族政策的な点に於て――将又移住者の定着性に対しても、決定的な役割を演じていることを明かにしている。上述の移住者の有能性ということの外に、出来る限りエッセン土着の人間に近似せる種類の人間のみを移住させることに意を用いた点はアルフレェト・クルップの特別の功績である。一八五〇年までは、少数の例外を除けばクルップ工場従業員はウェストファーレン人及び下ライン地方人より成っていた。三割はエッセン市及びエッセン近郊出身者であり、残りはミュンステルラント、リップシュタット、ハム、パデルボルン、レックリングハウゼン、下ライン地方、モーゼル河及ザール河流域の出身者であった。その後の十年間、アルフレェト・クルップはヘッセン人、ザクセン人、チューリンゲン人、下シレジア人を工場に吸引した。しかし従業員全体の相貌が既に徹底的にウェストファーレン＝下ライン色に染められていたが故に、来たばかりの「他所者」の移住者は全然形をとってあらはれるやうな勢力を得なかった。却ってそれらの者は極めて急速に同化した。（中略）斯くの如き土着的住民層の強大さによって、後年東部ドイツよりの多数の移住者を――彼等は能力に於て懸隔こそなけれ、種族的特性に於てはウェストファーレン、下ライン地方人と近似したところが少かったにも拘らず――大した困難もなく抱擁することが出来たのであった。これと反対の例は多くの近接都市に見られるところであって、例へばゲルゼンキルヘンは今日に於ても尚ほウェストファーレン的というよりはむしろ東部ドイツ的特色を多分に示している。同市は土着人が最初から尠かったばかりでなく、直接隣接する諸地方からの移住が行はれなかった。」

フランケはこのように述べているにしても、クルップの従業員数はフランケ自身の記すところによれば

一八三〇年	八	一八五八年	一、〇六三
一八五二年	三四五	一八六一年	二、一〇八

一八六四年	六、七五二	一	一八八七年	一三、〇四四

となっている。またリンゼイによると

一八三二年	一〇		一八六〇年	一、七六〇
一八四四年	一〇〇		一八六一年	二、六六〇
一八四七年	七二		一八六三年	四、一八〇
一八四八年	一〇〇		一八六四年	六、六九〇
一八五〇年	二三〇		一八六五年	八、一八〇
一八五五年	七〇〇		一八七一年	八、八一〇
一八五八年	一、〇四〇		一八八七年	一二、六〇〇

とある。[註(4)]

とにかく一八五〇年の従業員数はわずか二三〇名だ。その後の一〇年間に、一八五五年の七〇〇名を経て、一八五八年に一、〇六三名（リンゼイによれば一、〇四〇名）となり、一八六〇年には一、七六〇名、一八六一年二、一〇八名（リンゼイによれば二、六六〇名）と激増している。だからフランケのように一八五〇年までに「従業員全体の相貌が既に徹底的にウェストファーレン＝下ライン色に染められていたが故に」と理由づけるのは、おかしい。もし「東部ドイツ的特色」がエッセンのクルップ工場にすくなかったとすれば、その基礎は従業員八、〇〇〇名を超えるにいたった一八六〇年代後半に求むべきであろう。ここでフランケが問題にしている「東部ドイツ的」というものの中には、ポーランド系も含まれると思われるが、ポーランド系でない東部ドイツ人は、一八六〇年代にも下シュレージエン地方から若干は来ていたであろう。ベルリンからも熟練労働者が来たことは、あとで述べるところによって明らかである。

こうした労働者の移住については、西ドイツの「社会経済史季報」の昨年三月号にヴォルフガング・ケルマンが発表した論文「近代工業化、国内移住、および〝社会問題〟」が論及している。[註(5)] これは「十九世紀ドイツ近代工業大都市の発達史に寄せて」という副題をつけているが、そのなかでケルマンは十九世紀ドイツの国内移住についてつぎのように述べている。――近世におけるドイツの最初の人口波動 (die erste neuzeitliche Bevölkerungswelle) は、十八世紀の後半にはじまり、十九世紀の三〇年代までつづく。こうして速度をはやめた人口増加は、ところによって程度はちがうけれども、ほとんど全ドイツにわたって人口過多の現象をひきおこす。その結果は、カール・ヤントケがその「第四階級」で、[註(6)] 「土地をうしない、ツンフトをうしなった分子の下層が急速に拡大して貧困化すること」と述べている事態となる。一方では自由主義的な農業・商工業改革がおこなわれたけれども、それに対応する働き場の増加はなかったからである。ドイツの近代工業はその初期において資本がすくないため、優勢な外国との競争に悪戦苦闘せねばならなかった。問屋制の農村工業は保護をうけず、改良に必要な金融的バックをもたなかったために、機械との競争に負けて崩壊した。シュレージエンおよびラーヴェンスベルク地方の諸事件は、一般にひろがりつつあった困窮の極端な例にほかならず、この困窮は一八四六――四七年のバレイショの不作ののち頂点に達したのである。ところが五〇年代に入ると、「貧困」〝Pauperismus〟について歎きは聞かれなくなる。これは、過多人口がハケ口を見出したことを意味している。このハケ口は、二つのちがった流れをつくった。国外移住と国内移住とである。ところで、ドイツ人の国外移住は、さしあたり主として海外における農民的土地取得を意味していたが、国内移住のほうは、同時に農村から都市への移動となる。この移動が可能となったのは、この時期に近代工業化の第一期 (eine erste Industrialisierungsperiode) がはじまったからである。(ケルマンはこの時期をおよそ一八五〇――一八七〇年とし、「近代工業化の早期」(die Frühindustrialisierungsperiode あるいは die Periode der Fröhindustrialisierung とも呼ぶ。) 一八五〇年代にドイツの近代工業化が急速に進行しえたのは、一連の

要因がその有利な前提条件となっていた。豊作による国内市場の好況、ドイツ関税同盟の発展、イギリスの自由貿易化、クリミア戦争の影響、カリフォルニアおよびオーストラリアにおける金鉱の発見、交通機関の発展などがそれであるが、ドイツのブルジョワジーが一八四八年の革命の失敗ののち経済活動に精力を集中したことも、あずかって力があると見るべきだ。一八五〇年代と一八六〇年代とにおいて、「すべての決定的な経済的地位が新企業家層によって占められた」ことはヤントケの「第四階級」（一六一ページ）が指摘するところだが、近代工業国家（Industriestaat）へのドイツの発展は、まさしくこの時代に展開された。この新たに発生する近代工業のおかげで、農村の過多人口が収容され、それらの人口にたいして与えられる生計はささやかなものであり、それどころか貧困であることもしばしばだが、とにかくドイツは、一八四五——五四年のアイルランドのような過多人口からくる極度の大事件から免れることをえた。だがそれと同時に、新らしい労働者層（die neue Arbeiterschaft）が発生し、いまや「社会問題」は、農村の「貧困」から、都市のプロレタリアートの社会的問題性（die soziale Problematik des städtischen Proletariats）へと移行する。たしかに、この近代工業化の早期は、ビスマルク帝国の近代工業化の波動から見れば、その前奏曲にすぎない。しかし、とにかく近代工業化の開始こそ、社会問題の農村から都市への移行について決定的な意味をもつものである。一八七〇年からあとは、近代工業化の過程がいっそう速度をはやめる。これから第一次世界大戦にいたる高度近代工業化の時期（die Periode der Hochindustrialisierung）に、ドイツはヨーロッパ大陸の工業的優越国（die industrielle Vormacht）となった——とケルマンはいう。このばあいケルマンは国内移住（Binnenwanderung）を、その移住距離の大小にかかわらず、「一つの自治体（Gemeinde）から他の自治体へ居住地を移すこと」と定義する。したがって彼のいう「国内移住」のなかには、一つの村から隣村への移住も含まれるわけである。だから「国内移住」の問題は、単一の、同一方向の移動でなく、さまざまの方向・強度・構造をもった多くの移動を含むことになる。彼は個々の都市のがわからこれを見ることによって、国内移

住を三あるいは四群の移動に分ける。

（第一群）これは同時に最も早期の移住者群でもあるが、大都市の隣接地（Nachbarschaft）から来る。

（第二群）これは第一群よりやや広い範囲の近接地から、すなわち同一あるいは隣接の地方（Provinz）および邦（Land）から来る。こうした移動の調査は一九〇七年の統計によってしか詳細には判らないが、この統計では第一群の隣接地移住（Nachbarschaftswanderung）と第二群の近接地移住（Nahwanderung）との区別はできない。

（第三群）これは遠隔移住者（Fernwanderer）で、第一群および第二群以外の国内各地から来る。この第三群のうちでは、特に北ドイツからベルリンおよびルール地方に移住するものが、強度においてのみならず社会的重要性においても、他の地域からのものより卓越するので、ケルマンはこれを第四群として特別にあつかう。

ケルマンによれば、東北部ドイツ人の移住運動の歴史は、国土の社会的負担軽減（soziale Entlastung des Landes）と国内移住との関連（これは全ドイツにもあてはまる）を、特に明白に認識させてくれるものである。農民解放はプロイセンの東北部地域では「農業人口」の波動をひきおこしたが、この波動はさしあたり、いわゆる「ランデスアウスバウ」（開拓Landesausbau）によって、それに対応する生活基盤の拡大をおこなうことで収容された。こうした収容力の拡大によって、ドイツ東北部の諸地方は三〇年代および四〇年代に貧困現象からいちじるしく免れた。この時期に他のドイツ諸地方に見られたような人口過多の状況は、ドイツ東北部では一八六〇年代の末にはじめて発生する。しかし、この状況もその初期に移住で阻止された。七〇年代および八〇年代になると、東北諸地方は、地域的にズバぬけた最高の海外移住率を示す。しかし、それと同時に過剰の労働力が辺境（Randgebiete）の都市で今や近代工業の発展を開始したところに向って移動する。とりわけベルリンの人口増大における中核体をなしたものが、この東北部からの移住者だ――とケルマンは書

いている。

さきに述べたように、「クルップの労働者家族」では初代の出身地がほとんど記載されていないので、ケルマンの所論がどの程度まで妥当するかを検討しえないことは残念である。しかし、どんな社会層から出てきたかは比較的に詳しく記されているので、それによって考察をすすめよう。

八

「クルップの労働者家族」によって一八六〇年代にクルップに勤めたものを前歴の職種別に分類してみると、初代のばあい、農林牧畜関係はつぎのようになっている。

農民および農業労働者	四八	羊飼　一
森林労働者	一	

右の農民および農業労働者四八名について、さらにその内わけを詳しく見ると、農業日やとい労働者（Landwirtschaftlicher Tagelöhner）あるいは農民の下男（Bauernknecht）だったものが二六名いる。（本書では三世代にわたって詳しい調査のできた一九六家族について、家族番号をつけている。本稿では以下、たとえばF13のように家族番号を略記することにしたい。）こまかに記せば、この二六名のなかにも、農業労働者の長（いわゆるバウマイスター Baumeister）だったものがあり（F60）、下男頭（Erster Knecht）もあり（F108）、農業日やとい労働者たると同時に小屋住農（Kötter）でもあったというのもある（F79、F132、F147）。F119の初代は農業日やとい労働者であるが、左官の手伝い人夫（Maurerhandlanger）もしており、小さい家とわずかの農地を所有していた。しかし収入がすくないので工業地帯に移ろうと決意して一八六五年、四三才のときクルップの左官手伝い人夫（Maurerhandlanger）として入った。だが一八六九年まで家族を郷里（それがどこであるかは書いてない）に残し、所有地は小作させていた。（のち土地を売った。）彼は

病弱だったので、給料はクルップの平均給[註(8)]よりズッと下廻っていた。F_{136} の初代は、はじめ或る農場の下男だったが、のち所有主から家と若干の土地とを購入し、牝牛を三あるいは四頭飼い、以前の主人の馬を借りて耕し、経営もうまく行っていたが、知人のすすめでクルップに一八六三年、四四才で厩の下男（Stallknecht）として入った。のち厩長（Stallmeister）となっている。クルップでの給料は平均より上。[註(8)] F_{145} の初代は、ゆたかな農民の子として生まれたが、長兄が農場を相続し、弟妹はすこしばかりの土地をもらった。自分は農業日やとい労働をしていたが、知人にすすめられて一八五六年、三五才でクルップに入り、第一機械工場（1. Mech. Werkstatt）で、ドリル工（Bohrer）として修業したので、一八六五年ロイマチスにかかるまでは給料も平均より一五〇マルクも上だった。[註(9)] 一八六八年チブスで死亡。F_{151} の初代は小農の子に生まれ、両親の死後、相続分を売り、生活の向上を求めて工業地帯に移り、一八六六年、三〇才のときクルップにルツボ室（Tiegelkammer）の補助労働者（Hilfsarbeiter）として入る。一八六〇年代にも賃金は平均より上だった。[註(10)] 以上のように、こまかに見れば事情はさまざまであるが、農業日やとい労働者あるいは農民の下男だったもの二六名のうち、クルップに入って一八六〇年代の賃金が平均より上であったものは一三名、平均給に近いもの三名、平均より下のもの九名となっている。（残る一名については記載なし。）平均より下だったもののうち三名は、病気や災害のためと理由が記されているが、残り六名については理由は判らない。平均給より上だった一三名のうち、F_{136} と F_{145} についてはすでに述べたが、さきにバウマイスターだったというので触れた F_{60} の初代は、一八六四年、三四才でクルップの補助労働者として入り、一八六七年には大砲工場の補助労働者の組長（Vorarbeiter der Hilfsarbeiter）になっている。[註(11)] F_{61} の初代は農民の下男をやめて一八五八年、二七才でクルップの鋳鉄工場（Eisengiesserei）の補助労働者となった。一八六四年に死ぬが、も一人のクルップ労働者と共同でエッセンに小さな二軒つづきの家（ein Doppelhäuschen）を建てていた。[註(12)] 同じ F_{61} の初代の妻の父も、もと農民の下男だったが、一八六五年、二六才でクルップに入り、大砲工

場のフライス工（Fräser）となったので、賃金はたいてい平均より二〇〇マルクも上だった。フライス工となった修業過程は記されていない。おそらく年令も若いため、工場内で修得したのであろう。[註13] F108の初代についてはさきにも触れたが、彼は兵役まであちこちの農場で下男頭をしていた。一八六五年、二六才でクルップに入り、火夫および汽罐看視（Heitzer u. Kesselwärter）となる。賃金は平均よりやや上。[註14] F130の初代の義父はもと下男だったが、工業地帯にやって来て一八六三年、二八才のときクルップの補助労働者（Platz- u. Hilfsarbeiter）になったけれど、一・六〇マルクという低賃金のため去って一年足らずのあいだ鉱山日やとい（Bergtagelöhner）としてはたらき、二マルクの賃金を得ていた。しかし、一八六五年にクルップに帰り、プレス工（Gusshauer u. Presser）となる。賃金は平均よりやや上。F133の初代は或る農場の下男だったが、自身も小さな土年をもっていた。一八五九年、二二才でクルップの日やとい（Tagelöhner）として入る。平均給より上だったが、[註15] 一八六六年コレラで死亡。（この年のコレラでクルップ労働者に多数の死者が出ている。）F144の初代は農業日やとい労働者だったが、低収入のため生活の向上を求めて一八五二年、二七才でクルップの鍛工場（Hammerwerk）の補助鍛工（Hammergehilfe）として入り、のち組長（Vorarbeiter）となる。一八六五年ごろには平均より四〇〇マルクも上だったが、一八六六年のコレラで死亡した（四一才）。このように見てくると、若いときクルップに入ったものが給料もおおむね平均より上になっている。F22の初代も農業日やとい だったが、友人のすすめで一八五七年、二六才のときクルップに入り、運送夫（Fuhrmann）となり、一八六七年には厩長になっている。賃金はいつも平均より上で、三九年間勤続して一八九六年（六五才）死んだが、最後には平均給の二倍より上になっていた。[註16] F59の初代は前歴がわからないが、著者たちは「おそらく農業日やとい労働者であったろう」と推測している。一八五六年、二三才でクルップに入った。はじめの仕事は不明だが、のち輪鉄圧延工場（Bandagenwalzwerk）の管理人（Aufseher）になっている。給料はいつも良くて、たいてい平均より四〇〇ないし五〇〇マルクも上だった。

農業日やとい労働者、あるいは農民の下男だったもの二六名について見てきたが、このほかに、もとは農業日やといか農民の下男であったけれど、他の仕事をしたのちにクルップに入ったもの六名がある。F_{10}の初代は農業日やといだったが、のち或る鉱山の煉瓦労働者（Ziegelarbeiter）となり、一八五七年、四七才でクルップの煉瓦磨き夫（Ziegelputzer）となる。六年以上勤めて死んだが、たいてい平均給より下で生活は苦しかった。[註17] F_{14}の初代は兵役まで農業労働者だったが、一八五五年（二四才）ごろ、騎（あるいは輜重）兵大尉（Rittmeister）の推薦によって馬丁（Reitknecht）としてクルップに入ったとあるから、軍隊時代の上官のコネによるのであろう。一八五七年鍛工場の機関手（Maschinist）になったが、肺を病み、一八五九年第一機械工場の日やとい労働者になり、一八六五年には倉庫掛りとなる。賃金のことは記されていない。F_{27}の初代は兵役まで農民の下男であった。のちエッセンの或る鉱山で坑夫（Hauer）としてはたらき、一八六一年、三九才でクルップの運搬および補助労働者（Transport- u. Hilfsarbeiter）となった。一八七一年には鍛冶工（Hammerschmied）になったとあるが、その修得過程は書かれていない。賃金は一八七四年まで、部分的には平均よりズッと上。[註18] F_{30}の初代は農業日やとい（Landwirtschaftlicher Tagelöhner u. Rottenarbeiter）だったが、のち鉄道の労働者の組長（Rottenführer）となり、一八六四年、四〇才でクルップに入る。はじめ補助労働者だったが、まもなく刈込み労働者（Scherenarbeiter）となる。賃金はつねに平均より下。F_{56}の初代も農業労働者だった。左官の徒弟になったこともあるが、半年でやめた。一八才のとき工業地帯に出て鉄道建設の労働者としても何年間かはたらいた。一八五五年、二三才のときクルップに入り、火夫（Stocher）となる。二年のちに仕事がなくて、やめさせられ、農民の下男になった。一八五七年（二五才）ふたたびクルップに入り、鋼溶解工（Stahlschmelzer）となる。しばらくして鍛工場のハンマー組長次席（Zweiter Mann am Hammer）になっている。賃金は平均よりいつも上。F_{58}の初代は農業日やといだったが、収入の向上を求めて工業地帯に出て鉱夫となり、一八五六年、二一才でクルップの補助労働者、のち鍛冶工（Ham-

merschmied）になった。一八七四年まで賃金は平均より六〇〇マルクも上だったという。

そのほかに、借地農（Pächter）だったものが三名ある。F101の初代は或る農地の借地農だったが、一八六六年、三七才のときクルップの第一機械工場に補助労働者として入った。一八六八年には機関手になっている。賃金は平均よりすこし下だった。F143の初代は或る伯爵の下僕であったが、のち小農地の借地農となった。しかし暮らしてゆけないので、一八六五年、三六才でクルップの補助労働者となる。賃金は平均より下。五〇才で死んでいる。F187の初代も借地農だったが、収入がすくない。十二頭の馬による運送業のほうが主な収入源で生活は楽だったが、のち鉄道との競争や知人の連帯保証に立ったことなどで苦しくなり、エッセンにやってきた。一八六六年、四三才でクルップの補助労働者となり、翌年からレール圧延工場のレール整置工（Schienenrichter）になった。一八六八年ごろは平均給より上。のち病気をしてやや下になる。

農民および農業労働者四八名のうち三五名について述べたが、残りの一三名は、大小の差はあっても、とにかく農地の所有者あるいはその息子だったものである。F73の初代は四〇——五〇モルゲンの農地を所有していたが、負債が多くなったので一八六四年に売って、同年五四才でクルップの運搬夫（Transporteur）となった。多くの知人がすでにクルップではたらいていたからだという。賃金は平均よりズッと下。F98の初代も二五モルゲンの農地を所有していたが、一八六一年に売却した。一、三〇〇ターラー残ったが、妻の病気で使いはたし、一八六三年、三三才でクルップに入る。錬鉄工場（Puddelwerk）の鍛接工（Schweitzer）として二〇年間はたらいた。賃金は平均より上だった。F142の初代は小農地の所有者だったが、連帯保証人となったため一切を売って工業地帯に移り、一八六一年、二九才でクルップに入る。はじめ守衛（Wächter）から補助鍛工（Hammergehilfe）となり、のちハンマー組長三席（3.Mann am Hammer）さらにハンマー組長次席（2.Mann am Hammer）へ累進したが、のち病気で機関手（Maschinist）に廻された。平均給

より上（のち下）。F_{71}の初代も自作農で、かたわら製粉所（Mühle）を借りて経営していたが、家畜の死やその他の損失で生活が苦しくなり、工業地帯に出て、一年ほど或る鉱山にはたらき、一八六六年、四二才でクルップの補助労働者となる。はじめガス供給所（Gasanstalt）、のちバネ工場（Federwerkstatt）に移ったが、いつも平均給より下。F_{75}の初代のばあい、父はゆたかな自営農で、父の死後、遺産で一つの小さな農場を買いとり、家畜も何頭か飼って暮らしはうまくいっていたが、争いのために移ったという。一八六六年（四二才）ごろクルップの大砲工場の補助労働者となる。病弱だったので、いつも平均給よりズッと下だった。F_{74}の初代は、父が一〇〇モルゲンの所有者だったが、父から分けてもらった農地の経営に不熱心のため七モルゲンに減った。一八六四年に売ってエッセンに移る。或る汽罐鍛冶（Kesselschmied）の補助労働者になったが、収入がすくないので、一八六六年、四五才でクルップが借りている鉱山のコークス火夫となる。平均給より下。F_{100}の初代は結婚するまで父の農場ではたらき、結婚してから妻の両親の農場に行ったが、実家の父が農業収益のすくないためにエッセンの或る機械製造工場に入ったので、約一〇モルゲンの父の農地を経営した。しかし兄弟姉妹に仕払うために負債ができて土地の一部を売り、残りは小作させて自分もエッセンに出た。一八六七年、三二才でクルップの運搬および倉庫労働者（Transport- u. Magazinarbeiter）となった。賃金は平均給よりすこし下。F_{26}のばあいは、兵役がすんで小農の娘と結婚した。妻が家と少しの土地をもっていたので、夏は砕石労働者としてはたらき、農業は妻がやるという風だったが、兄弟の一人がクルップの組長（Obermeister）になっていたので、一八六四年、四〇才でクルップに入り、鋳造工（Giesser）となる。一八七一年までは平均給より下だったが、のち上になった。F_{42}の初代は兵役まで両親のもとで農業に従事し、一八四二年ごろから自分の農地（おそらく妻の嫁資であろうと共著者は見ている）ではたらいた。しかし一八六〇年代のはじめに負債が多くなったので、やむをえず売り、郷里（どこか書いてない）で農業日やとい労働を二、三年していた。長男が一八六二年からクルップに入ったので、そのすすめで一八

六三年、四四才のときクルップの補助労働者になった。このとき家族は郷里に残したまま単身だったが、二、三カ月でクルップをやめた。理由は判らない。一八六六年、こんどは家族とともにエッセンに移り、クルップの運搬隊（Transportkolonne）の運搬夫となる。いつも平均給より下だった。F164の初代は二〇才まで両親のもとで農業に従事し、それから工業地帯に出て、一八五〇年から五二年までクルップの補助労働者となったが、五三年クルップをやめて同じエッセンの或る機械製造工場にはたらき、同年ふたたびクルップの補助労働者となった。ときに二五才。そののち賃金は平均よりズッと上。F121の初代のばあいは、父が親方靴工で、かたわら農業も営んでいたので、はじめ父の農業を手伝い、のち下僕となったが収入がすくないので、工業地帯に出た。一八六三年、三四才でクルップに入り、石プレス工（Steinpresser）となった。賃金ははじめ平均よりすこし下だったが、やがて平均給になり、一八六六年からは平均よりズッと上。F31の初代は、その父がクルップの鍛工場（Hammer）ではたらいていた。この父は土地と小屋をもっていたので、初代ははじめ父の土地の農業に従事したが、一八四〇年（一七才）ごろクルップに入り、旋盤工（Dreher）になった、とあるけれども修得過程は書いてない。賃金は平均よりすこし上。F118の初代は、その父がゆたかな自営農だったけれど、初代は小屋住農（Kötter）で農業日やといを兼ねた。負債が多くなって一八六六年に所有地を売り、工業地帯に出た。同年（四六才）クルップのガスおよび水供給所（Gas- und Wasserwerk）の日やとい労働者（Tagelöhner）となる。平均給よりズッと下だった。

農業から工業への移動はこの時代の労働市場の構造を分析する上に、また労働者の主体的および客観的条件を考えるためにも重要なので、なるべく詳記した。さきの表に森林労働者（Waldarbeiter）一名と書いたのはF12の初代のことで、彼は小さな家とすこしの土地と二、三頭の家畜をもっていたが、はじめ単身で工業地帯に出て或る鉱山ではたらいた。のち家族を呼びよせ、所有地は四〇〇ターラーで売った。賃金が高いので一八六四年（五七才）でクルップの木材運搬夫と

なる。そののち一五年間はたらいて最後まで頑健だった。賃金は平均より下。羊飼（Schäfer）一名というのはF166の初代で、はじめ父とともに牧羊に従事したが、全頭数の三分の一は彼ら父子の所有だった。しかし父との折合いがわるく、家畜が多く死んだりしたので父とわかれる。自分の妻の相続分として九モルゲンの農地があったので、これを経営したが、負債がかさみ、売却して一八六三年、四六才でクルップのルツボ工場の補助労働者となった。賃金は平均給だった。

以上、農林牧畜関係五〇名はほとんど一八六〇年代にクルップに入ったもので、F145の初代だけが一八五五年に入っている（年令不明）。入社のときの年令別にみると

五〇才以上	二名	二〇－二九才	一二名
四〇－四九才	一八名	年令不詳	一名
三〇－三九才	一六名		

となる。平均給との関係をみると、五〇代で入った二名はどちらも平均給より下である。四〇代で入った一八名のうち、平均給より上だったものは四名（うち一名は一八七一年までは下、そののち上になる）で、平均給だったものが四名（うち一名ははじめだけ平均給で、のち下になる）、残りの一〇名は平均より下だった。三〇代で入った一六名のうち、平均給より下だったものは六名で、平均給が一名、残りの九名のうち二名は賃金がよく判らず、七名は平均給より上（うち一名は部分的に或る時期に上）となっている。これが二〇代に入ったものになると、入社のはじめだけ平均給よりやや下で、のち上となったものが一名で、残りの一一名は平均給より上であり、そのうち五名は平均よりズッと上になっている。これによって、若くして入ったものが有利だったことが判る。

このように、若くして入社したものが有利であったことは、二代目の例をみると、いっそう明らかになる。二代目で一

八六〇年代にクルップに入ったもの二九名について調べると、入ってのち正規の徒弟（Lehrling）として修得したもの一二名はその後の賃金が平均給より上である。たとえばF_{17}の二代目は一八六八年から七一年までクルップのいろいろの職場の補助労働者としてはたらき、それから旋盤工の徒弟（Dreherlehrling）として修業し、一八八七年まで旋盤工として勤めた。賃金は、のちには平均より上。[註(19)] F_{28}の二代目は一八六七年、一四才でクルップの旋盤工徒弟となり修業したので、のちには平均給よりつねに二〇〇――四〇〇マルクも上だった。[註(20)] F_{36}の二代目も一八六七年、一四才でクルップの走り使い少年（Laufbursche）として入り、のち旋盤工徒弟となり、一八七八年まで旋盤工として勤めたが、つねに平均給よりズッと上。F_{39}の二代目は学校を卒業してすぐクルップの徒弟に入れなかったので、エッセンの或る印刷所ではたらいたが、一八六一年（一五才）にクルップの旋盤工徒弟となった。六四年から六七年まで職人として遍歴（ワタリ）したのち、六七年にクルップの旋盤工になった。平均給より上。F_{37}の二代目は、はじめ植字工を希望し、一年間その徒弟になったが興味をうしない、一五才でクルップの錠前工徒弟（Schlosserlehrling）となり、その期間が終ったのち二年間ワタリをして一八六六年クルップに帰り、一八七四年まで錠前工として務めたが、賃金はつねに平均よりズッと上だった。F_{88}の二代目は一八六二年、一四才のときクルップの錠前工・旋盤工徒弟（Schlosser-Dreherlehrling）となり修得後は大砲工場ではたらいたが、つねに平均給よりズッと上で、一八六八年ごろは一、五〇〇マルクに達した。F_{180}の二代目も一八六五年、一四才でクルップの鍛工場の走り使い少年となり、二〇〇マルクだったが、錠前工徒弟として修業し、終って第一修理工場の錠前工となる。賃金は特に一八七〇年から非常によくなっている。F_{170}の二代目は、父の収入がすくなかったにもかかわらず、平けずり盤工（Hobler）徒弟として四年間の修業をつんだ。一八七〇年代の賃金は平均よりズッと上になっている。F_{176}の二代目も家が貧しかったのに、一八六六年（一四才）走り使い少年から平けずり盤工徒弟になった。一八七〇年には、すでに平均給に追いついている。F_{102}の二代目は一八六九年（一三才）クルッ

プに石集め少年（Steinleser）として入り、のち鍛冶工徒弟（Schmiedlehrling）となる。はじめ病気で平均給だったが、のち上。F_{41}の二代目は一八六七年、一四才でクルップの Platzarbeiter となり、一年のち砂型工徒弟（Sandformerlehrling）になることができた。修業後は鋳型工（Former）として勤続したが、平均給よりズッと上だった。F_{12}の二代目は一八六二年、一四才でクルップの家具工徒弟（Schreinerlehrling）になった。職人としてワタリをしたのち、一八七一年クルップに帰り、監督（Aufseher）となり、一八九四年にマイスターになった。賃金はいつも良かった。

二代目で徒弟になれなかったものは、たいてい補助工に終っているが、それでも賃金は平均か平均より上のものが多い。F_{84}の二代目は一八六八年、一四才でクルップの走り使い少年となり、のち補助および修理錠前工（Hilfs- und Reparaturschlosser）となったが、のちには、平均給よりズッと上だった。[註21] F_{10}の二代目は一八六八年、一四才でクルップの石磨き・下ばたらき（Steinputzer und Handlanger）として入った。五年のち或る職場への配転を希望して容れられなかったので、クルップを去って或る鉱山に三カ月はたらき、またクルップに復帰した（一九才）。はじめ補助労働者だったが、まもなく鋳造工（Giesser）となり、一八九六年マイスター、一九〇四年オーバーマイスターになっている。賃金は平均より上。F_{148}の二代目は父の収入がすくないので、徒弟となることができず、はじめエッセンの農業日やとい労働で、まかない付きで日給一マルクだったが、一八六五年（一五才）クルップの走り使い少年となる。のち錬鉄工場の補助労働者になったが、八〇〇——九〇〇マルクを得ているから、平均か平均より上である。F_{157}の二代目も家庭が貧しく、それに長男だから、すぐ稼いで家計を助けねばならないので徒弟になれず、一八六六年（一四才）クルップの走り使い少年となり、翌年には補助労働者、その翌年には一六才で向う槌（Zuschläger）になり、八〇〇マルクだから、ほぼ平均給だった。F_{118}の二代目も家計のため徒弟修業ができず、一八六七年（一五才）クルップの石集めとなり、六九年には一七才でクルップのベッセマー工場の手伝いになり、七〇〇マルクぐらいを得ている。これは平均給より下だが、し

かしそののち上昇が早かった。

九

初代の前歴が農林牧畜関係であるものについて述べ、そのばあい年が若くてクルップに入ったものほど有利であったことを見たのであるが、前歴が農林牧畜以外のものであった人たちはどうか。同じく「クルップの労働者家族」によって初代が一八六〇年代にクルップに勤めたものを職種別に分類すると、つぎのようになる。（徒弟期間を修業したことの明らかなもの、いわゆる熟練労働者は○印をつけた。）

○錠前工	二二	○パン工	四
○鍛冶工	八	○仕立工	四
○ヤスリ工	一	○織布工	二
○時計工	一	○靴下工	一
圧延工	一	織布工場労働者	二
熔鉄工	一	絹織工	一
機関車火夫	二	染色労働者	一
鍛接工	一	○パイプ工	三
○左官	八	○カゴ工	二
左官手伝い	二	○ブラシ工	一
○家具工	七	○庭師	一
○大工	四	鉱夫	五
○桶工	一	陶土掘り	一
○画工	一	その他の不熟練労働者	三
醸造労働者	一	その他（商人、公務員）	四
○靴工	五	不詳	一

錠前工（Schlosser）二二名のうち賃金が平均より下だったのは、F3の初代だけで、残り二一名は全部平均より上である。F3の初代のばあいも一八六三年、四七才でクルップに入ったときは平均給が七〇〇マルクくらいなのに、それより五〇マルクほど上廻る賃金になっている。そののち賃金が平均を下廻った理由は判らない。勤続二六年間の最後まで健康でたくましかったという。彼は親方錠前工として独立自営していたが、収益がすくないので独立をやめ、一〇年間或る製粉所（蒸気機関を使う Dampfmühle）ではたらいたが日給一・二〇マルクだった。クルップでは年七五〇マルクにもなるのだから、そちらに移ったのだ。F1の初代は親方錠前工の子なので、父のもとで錠前工と鍛冶工の修業をして結婚のち妻の住所で親方錠前工および鍛冶工として独立し、いつも職人や徒弟を二人か三人おいて経営もうまく行ったが、一八四八年ごろから経営がうまく行かず得意先も減り、一八五五年にクルップに入った（年令不詳）。すでにクルップでマイスターになっていた或る友人のすすめによるという。はじめは鍛工場の錠前工で、まもなくマイスターとなる。当時はクルップの平均給が六〇〇マルクなのに、初任の当初から一二〇〇マルクだった。いかに熟練工を優遇したかが判る。F19の初代はエッセン生まれで、両親は貧しかった。同市で錠前工の徒弟期間を終っていろいろの親方のところではたらき、また或る機械製造工場にも勤めたが、一八六一年、二七才でクルップに入り、一年後にはマイスターになっている。当初は平均六五〇マルクくらいのときに九五〇マルクほどだが、その後の賃金上昇はすさまじく、一八六五年平均七〇〇マルクくらいのころに一四〇〇マルク、一八六七年平均七五〇マルクのころに一六〇〇マルク、一八七〇年平均九〇〇マルクのときに一八〇〇マルク、一八七五年平均一一五〇マルクのとき二四五〇マルクといったふうに、いつも平均の二倍あるいはそれ以上となっている。F33の初代はエッセンの自営農民で織匠を兼ねるものの子だが、同市で錠前工と旋盤工の職を修得し、一八四五年、二五才でクルップに入った。大砲工場で錠前工、旋盤工、ドリル工としてはたらいたが、一八六〇年に平均給六五〇マルクほどのとき八六〇マルクぐらい、一八六五年には一六〇〇マルク、一八六七年にも

一六〇〇マルクである。この間に一八六一年二三〇〇マルク、一八六六年二二五〇マルク、一八六九年には二八〇〇マルクに近いこともある。

鍛冶工（Schmied）八名のうち一名は針鍛冶工（Nagelschmied）である。F_{168}の初代がそれで、独立親方として職人を二人か三人おいて、かたわらに農業もすこし営んだが、のち負債が多くなったので売って、しばらく架橋工事の労働者としてはたらいたのち、一八六五年（三八才）クルップに入った。平均給でやとわれているし、そののち平均を下廻ったが、健康がすぐれなかったせいのようだ。普通の鍛冶工七名のうちF_{43}は独立の親方鍛冶だったが一八五五年（生年不詳）クルップに入った。はじめ補助労働者としてはたらき、一八五九年工場災害で死ぬ前にフライス工（Fräser）になっている。賃金は平均よりやや下廻った。F_{141}の初代については、クルップに入る前に或る陶磁器工場ではたらいていたことしか判らない。一八五九年ごろクルップに入り、まもなく去ってエッセンの或る鉄板工場の塊鉄鍛冶工（Luppenschmied）になった。修得過程は不明。一八六一年、二六才でふたたびクルップに入り、一八六三年まで石室およびルツボ室の補助労働者となる。そののち石仕分け工（Steinsortierer）となったが、病弱で平均給より下のことが多かった。以上の三名を除けば、残りの五名はいずれも賃金が平均給より上で、F_{17}の初代は一八五一年（二四才）クルップに入ったが、五五年以降つねに平均給の二倍以上で、六四年からマイスターになった。六八年ごろは平均給八〇〇マルクのときに二三〇〇マルク以上になっている。F_{28}の初代は一八六三年（三五才）クルップに入り、二五年間も鍛冶工として勤めた。マイスターにならなかったが、賃金は初任のとき一五〇〇マルクに近く、そののち一〇〇〇マルクまで下がったこともあるが、平均よりズッと上だった。一八六九年ごろ平均九〇〇マルクぐらいのときに一六〇〇マルクになっている。F_{39}の初代は農業日やとい労働者だったが、一八三〇年代のはじめに工業地帯に出てグーテホフヌング製鉄所（Gutehoffnungshütte）で修業して汽罐鍛冶工（Kesselschmied）となり、二十三年勤続した。彼は五室ある住宅と菜園

を所有し、二、三モルゲンの農地を借地し、一頭の牝牛と二頭の豚を飼ったので、暮らしは全く良かったが、クルップではたらいていた次男にすすめられて所有地を売り、一八五四年（五四才）クルップに入ってネジ工（Schraubenschneider）として一四年勤めた。賃金は平均より一〇〇あるいは二〇〇マルク上になっている。

そのほかの職種でクルップに入ったのち前歴を生かして熟練工となりえたのは、ヤスリ工、時計工、圧延工、溶鉄工（Schmelzer）、鍛接工（Schweisser）、火夫、左官、家具工、大工などである。F55の初代は修業したヤスリ工で、ルール地方のボーフム（Bochum）市ではたらいたが収入がすくないためゾーリンゲンの鋼鉄製品の行商人になった。一八六三年、三六才でクルップにヤスリ工として入る。初任のとき、平均給七〇〇マルクより四五〇マルクも高く、その後も平均より四〇〇マルク近く上。圧延工のF106初代は一八五五年(三〇才)クルップに入った。一八六八年ごろには平均給より四〇〇マルクぐらい高い。しかし、クルップに補助労働者として入ったのちに修得した職種によって熟練工となり、高い賃金をえたものもある。F176の初代は或るパイプ卸商の倉庫労働者だったが、一八五五年（三一才）クルップの補助労働者になった。まもなく平けずり盤工としての教育を受け、さらに六一年からはフライス工となっている。六五年ごろは平均給の二倍、すなわち一四〇〇マルクに達した。リヒャルト・エーレンベルクが「テューネン・アルヒーフ」に発表した論考「クルップ研究」によると、クルップ工場の徒弟養成期間は二年であった。旋盤工ハインリッヒはエッセンのギュムナージウム（七年制高校）の図画教師の子で、一年志願兵の資格をえたのち一八五四年クルップの旋盤工徒弟となり、翌年秋にはすでに一三、のち一四グロシェンの賃金をえた。これは当時の徒弟としては非常に多額だという。そのほかに、まもなく出来高払いの仕事も与えられた。五六年に徒弟期間が終ると、彼はクルップを出て、ちょうど設立されたばかりのエッセンの或る機械製造工場の錠前工徒弟となった。二年の期間を終って国内や国外の他企業にはたらいて一八六五年クルップに帰った。このときは機械組立工（Monteur）として入り、翌年マイスターとなり、そののち累進して一

八九四年にはオーバーマイスターになった。その賃金は一八六七年一五五三マルク、七五年二五二〇マルク、八五年二八八〇マルク、九五年四四〇〇マルクとなっている。[註(22)]

以上、「クルップの労働者家族」を中心としてその労働力の供給源に焦点を合わせて見てきたが、一八五〇年代から六〇年代にわたって興隆するドイツ重工業の労働力が主として農業と手工業とからの転業者から構成されたことが判る。鉱山からきたものもあるが、それももとは農村から出ているものが多い。ヤントケはその「第四階級」のなかで、フリードリッヒ・ジループが一九一五年に発表した上シュレージエンの或る精錬鉄圧延工場（Feineisenwalzwerk）労働者一三一名の社会的出自の調査を引用して、これは、ひろくドイツ全体について典型的なものと見ることができる、といっている。[註(23)]この一三一名の労働者の男系祖父の前職は

農業労働者	七四	その他の労働者	八
手工業者	二四	商人	一
Hüttenarbeiter	二三	Landschaftssyndikus（農村の弁護士）	一

となっている。（ヒュッテンアルバイターは製鉄所・鉄工場・冶金工場などのほかにガラスや煉瓦の工場にはたらく人びとをも指す。）これが父の前職となると、つぎのように変ってくる。（カッコ内は祖父のばあいと比べての増減数を示す）

農業労働者	四三（−31）	その他の労働者	一〇（＋2）
手工業者	一六（−8）	水門見張人	一（前出の商人の子）
Hüttenarbeiter	六〇（＋37）	司法官試補	一（前出の農村弁護士の子）

ヒュッテンアルバイターがいちじるしく増しているところに、工業の発展にともなう変化が見られるわけである。ジル

ープの調査のおこなわれた年代から逆算して、この祖父の職業はほぼ一八五〇年から六〇年代ごろのものを示していると見て大過なかろう。この数字がすぐ五〇年代や六〇年代の工場労働者の構成に結びつくわけではないが、十九世紀後半におけるドイツ社会構造の変化を考える上に示唆的である。「クルップの労働者家族」のばあいも、一九六家族の初代だけで全般を律することは危険だが、いちおう参考にはなるので、前職の数字をあげたわけである。いずれにしても、一八六〇年代に新興の重工業が熟練労働者の不足に苦しみ、したがってその賃金が高かったことは上に見てきたところによって明らかであろう。エーレンベルクは「クルップ研究」のなかでつぎのように述べている。――一八四九年に労働力の需要が非常に急速に増大したとき、以前と同じように、さしあたりまず主として不修得（ungelernt）の、すなわちその職種の徒弟期間を通らなかった労働者がすぐ近くの、あるいはやや離れた周辺地帯から採用された。一八五〇年のはじめに二八〇人の労働者が雇用されていたのに、そののち九カ月のうちに二〇〇人以上も入ってきた。この新しい労働力のうち大部分はまもなく他へ去った。残りが比較的長く留まり、その一部は非常に長くクルップに勤続した。つぎの諸年に労働者の数がふえるたびごとに、この現象がくりかえされた。しかし、いわゆる熟練工、すなわち徒弟期間を通ってきた既修得（angelernt）の鍛工（Hammerschmied）や錠前工、さらに若干の旋盤工、および家具工・左官・圧延工だけは、ちがった方法で募集された。たとえば鍛工は大部分はグーテホフヌング製鉄所のあるシュテルクラーデ（Sterkrade）オーバーハウゼン（Oberhausen）の諸企業からやってきた。そこからは、車軸旋盤のために若干の旋盤工も高い賃金でつれてこられた。そのほかにヘルデ（Hörde）、アプラーベック（Aplerbeck）、ボーフムからもつれてきた。車軸旋盤はほかの企業ではもっと以前からおこなわれていたけれど、普通の鉄車軸であって、鋼鉄車軸ではなかった。こうしてつれてきた旋盤工のなかには、非常に有能なものもいたが、大部分は鋼鉄の旋盤には熟練していなかった。だから旋盤工マイスターは素質のある補助労働者に旋盤を教えこみはじめた。既修得の労働者が不足すると、くりかえし新聞広告をして他企業からつ

れてこようとした。あるいはマイスターたちが募集に出かけた。けれども、どの募集方法も効果が多くないことが判った。なるほど若干は来たし、ベルリンからさえ来たが、彼らは長くいなかった。クルップの仕事はベルリンから来たものには多すぎた。またベルリンのものには賃金も十分でなかった。ベルリンでは錠前工はすでに一ターラー、ばあいによってはそれ以上もとっていたからだ――とエーレンベルクは書いている。[註24]

このように見てくると、一八六〇年代にベルリンの機械工の大部分がラッサール派やアイゼナッハ派の運動についてこなかった理由が判る。機械製造工場の熟練工、すなわち徒弟期間を通った既修得の労働者は、当時ひく手あまたのありさまで賃金も高く、いわゆる労働貴族を構成していた。マイスターでなくヒラの熟練工でいたほうが出来高払いの仕事で収入が多いため、マイスターになるのをいやがったハイケン（Heiken）という名のクルップ労働者の例をエーレンベルクはあげている。[註25] ベルリンではクルップよりも賃金が（労働量に比して）高い。一八六八年九月のベルリン労働者大会から分離した機械工代議員は、このような熟練工を代表していたのである。もちろん造機工場は高賃金の熟練工のみによって構成されていたのではない。むしろ農業労働者あるいは他の没落手工業から転じた不熟練の補助労働者のほうが多かった。しかし、彼らはその職種においては一人前として扱われないし、彼ら自身もこの段階では劣等感のほうが強く、労働者としての権利を主張することからは、まだほど遠かった。彼らの大部分は新興の機械制工場の設備とシステムに圧倒され、産業資本主義の隆々たる発展に気おされて、ただ自分と家族の生活を守ることに精いっぱいであったであろう。熟練工の大部分が進歩党系の指導者の唱える労使協調主義にひきつけられていったのは、彼らの相対的高賃金のほかに、商社がおこなう福利厚生施設や制度（といっても当時のものはわずかの程度であるが）とも関係するであろう。本稿では、この面に立ちいるゆとりがないので、他日、稿を改めて考察したい。[註26]

本稿のはじめに述べたように、ベンザーは一八六〇年代のドイツ労働運動で工場労働者の役割がしばしば過大評価され

ていたという。[註27] 彼によればドイツで工場労働者が労働運動の中核となるのは、一八七〇年代の末からだとされる。それは確かにそのとおりであろう。

しかし、われわれは一八六〇年代のドイツ労働運動における工場労働者の役割を過小評価してもならない。労働組合の結成については、ラッサール派やアイゼナッハ派よりも進歩党のほうが先鞭をつけたともいえるし、そのばあい彼ら進歩党系リーダーの運動の基盤は工場労働者にあったと見るべきであろう。総じてこのように産業資本主義がめざましく興隆してくる段階では、どの国においても工場労働者の大部分は資本主義を既成の事実としてそのワクのなかで労働条件の向上をかちとろうとする。経営者もヒルシュ派の地区組合のように、企業意識をもち易い組合のみを認めてそれを育成しようとする。しかし、ここでわれわれが特に留意しなければならないことは、工場労働者がラッサール派やアイゼナッハ派にすぐついてこないからといって、彼らが資本主義の矛盾にまったく無感覚であり無抵抗であったと考えては大きな誤りを犯すことになる、という一点である。さきに述べた一八六九年春のベルリン鍛冶工の闘争は主として小企業の雇主にたいするものであったが、これらの鍛冶工はヒルシュ・ドゥンカー派の組合をつくっていた。同年ハンブルクのラウエンシュタイン車輛工場のストでは、少数を除いて工場内のほとんどすべての労働者がストに参加し、その数およそ一四〇〇名にのぼった。前年の六八年末ベルリンのボルジッヒ工場における紛争についても、すでに述べた。[註28] 労働者は、どんな場合にも資本の圧力を感じている。その圧力が彼らの生活をおびやかせば、身を守るために立ちあがるエネルギーをもっている。このエネルギーは一八六〇年代にアイゼナッハ派やラッサール派についてこなかった工場労働者のうちにも紛うかたなく存在し、機に応じて発現した。ヒルシュ・ドゥンカー派にひきつけられたこと自体も、もちろん決して歴史的発展の本流に棹さすものではないが、やはり、このエネルギーのあらわれ方の一つであると見なければならぬ。この観点を失すると、われわれは一八六〇年代のドイツ労働運動史における工場労働者の役割を過小評価することになり、ひいては

七〇年代に工場労働者が大きく労働運動史の前景に出てくる根源をも現象的にしか理解しえないことになろう。

註(1) Krupp'sche Arbeiter-Familien. Entwicklung und Entwicklungs-Faktoren von drei Generationen deutscher Arbeiter. Bearbeitet von Richard Ehrenberg und Hugo Racine. Archiv für exakte Wirtschaftsforschung (Thünen-Archiv), Sechstes Ergänzungsheft. Verlag von Gustav Fischer, Jena, 1912.

註(2) 本書は「精密（exakt）科学」たることをめざすエーレンベルクの方法論にもとづいて、いちおう史料批判の厳正を期している。また各家族について一八四五年から一九一〇年までの賃金グラフをつくり、クルップ工場の平均賃金を実線で、初代および二代目の賃金をそれぞれちがった点線であらわし、平均賃金と比較できるようにしている。本稿では、このグラフによってその時の平均賃金を記したから、金額はおよその見当たらざるをえない。

註(3) この訳本の原書はゲルハルト・カルレン編「ドイツの一家門企業の経営者アルフレット・クルップ――十九世紀における西部ドイツ地方経済史への一寄与」（邦訳三ページ）。筆者はこの原書を参照しえなかった。

註(4) Lindsay, Samuel M.: Social Work at the Krupp Foundries (Annals of the American Academy of Political and Social Science, Vol. Ⅲ. No. 3 : 1892), p. 77. 因みにリンゼイの数字はエッセンで雇用されている男子のみを示すもので、エッセン以外の分工場（branch works）を含めると、平均五〇パーセント増になるという。

註(5) Köllmann, Wolfgang: Industrialisierung, Binnenwanderung und „Soziale Frage" (Zur Entstehungsgeschichte der deutschen Industriegrossstadt in 19. Jahrhundert). Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 46. Band, Heft 1 (März 1959), SS. 48～60.

註(6) ケルマンがここで指しているのは Jantke, Carl: Der vierte Stand. Die gestaltenden Kräfte der deutschen Arbeiterbewegung im XIX. Jahrhundert (Freiburg 1955), S. 41.

註(7) グラフによると、一八六五年の平均賃金は七〇〇マルクにたいして、彼は四〇〇マルク、六八年ごろの平均八〇〇マルクにたい

して五〇〇マルクをすこし上廻った程度である。

註(8) グラフによると、一八六三年の平均給七〇〇マルクにたいして同額、それから上昇して六六年には平均七五〇マルクのときに九〇〇マルク、六九年に平均が九〇〇マルクに近いときに一、〇〇〇マルク近くなつている。

註(9) 一八六〇年平均約六五〇マルクのとき八〇〇マルクに近く、六四年平均七〇〇マルクのとき八五〇マルク。

註(10) 一八六六年には平均よりすこし上の八〇〇マルク、七〇年平均九〇〇マルクにたいして一、一〇〇マルク。

註(11) 六四年には平均七〇〇マルクのとき六〇〇マルクだが、そののち上昇して六七年ごろは平均七五〇マルクのとき八五〇マルク、翌年には平均八〇〇マルクのとき一、〇〇〇マルク、七〇年平均九〇〇マルクのとき一、二〇〇マルク。

註(12) 五八年には平均六〇〇マルクのとき約五八〇マルクだが、のち上昇して六三年ごろは平均七〇〇マルクのとき八〇〇マルク。

註(13) おそらく二年間の徒弟期間を経たのであろう。

註(14) 六五年には平均七〇〇マルクのとき六〇〇マルクだが、翌年には平均七五〇マルクのとき九〇〇マルク。

註(15) 五九年平均六〇〇マルクのとき約六五〇マルク、六五年には平均七〇〇マルクのとき八五〇マルク。

註(16) 五七年の平均六〇〇マルクのとき、それをすこし上廻る。のち上昇して六〇年代にはたいてい平均給より二〇〇マルクほど多い。

註(17) 五七年には平均六〇〇マルクのとき四五〇マルクに満たないが、そののち上昇して六一年ごろは平均六五〇マルクのとき七〇〇マルク。そののち下がり、六二年には平均六五〇マルクとほぼ同額、のち平均より下がる。

註(18) 六六年には平均七五〇マルクのとき八〇〇マルク、六八年ごろは平均八〇〇マルクのとき一、一〇〇マルク。

註(19) 六八年には平均八〇〇マルクのとき二五〇マルク、七〇年平均九〇〇マルクのとき七〇〇マルク、七三年平均一、一〇〇マルクのとき一、三〇〇マルクを上廻った。

註(20) 六七年には平均七五〇マルクのとき三五〇マルク、七三年ごろ平均給に追いつき、七五年には平均約一、一五〇マルクのとき一、

三〇〇マルクを上廻る。

註㉑　六八年には平均八〇〇マルクのとき約二五〇マルクだが、七三年には平均に追いつき、七四年には平均一、一五〇マルクのとき一、三〇〇マルクを上廻る。

註㉒　Ehrenberg, R.: Krupp-Studien. Ⅲ., in: Archiv für exakte Wirtschaftsforschung (Thünen-Archiv), Bd. 3. 1911. S. 101.

註㉓　Jantke. S. 168. Syrup, Fr.: Die soziale Lage der seshaften Arbeiterschaft eines oberschlesischen Walzwerkes, in: Schriften d. Vereins f. Sozialpolitik, Bd. 153, München-Leipzig 1915.

註㉔　Ehrenberg: Krupp-Studien. SS. 74～75. リンゼイによると、一八六四年のクルップの徒弟数は五四名であった。Lindsay, p. 102. なお「クルップの仕事はベルリンから来たものには多すぎた」という点については、クルップの労働強化を考えるべきであろう。因みに、クルップの労使関係についてはベルンハルト・メンネの指摘がかなり当っているのではなかろうか。彼によると――クルップと労働者とのあいだに相互信頼の関係があったとしばしばいわれるが、そんな関係はエッセンでは一度も存在したことはない。若き日のアルフレット・クルップが一八三八年に出した「工場労働者服務規律」にすでに「反抗せんとするもの、あるいは義務を果たさないものは、見つけしだい解雇される。同じ過失をくりかえすものも同様である。オベッカ者は直ちに免職される。厚顔無恥は即座に罰せられる」とある。このような志向は、年が経過してもあまり変わっていない。クルップが管理部に出した何百という勧告がそれを物語っている。平凡な人間、従順な役畜（Arbeitstiere）が彼の理想的人間像だ。一八七七年には、社会主義的教説は怠け者や無能者の支配をめざすものだといい、労働者の政治的権利などは一切認めようとしない。現にその後まもなく工場内で社会主義の宣伝をしたかどで三〇人の労働者のクビを切った――というのである。Menne, Bernhard: Krupp. Deutschlands Kanonenkönige. Zürich 1937. SS. 144～145.

註㉕　Ehrenberg: Krupp-Studien. S. 102.

註㉖　リンゼイによると、クルップでは一八五三年に疾病・死亡基金の制度があり、商社と被雇用者の両方が掛金を払いこんでいた。加入者は一八五六年に一、七五〇名だった。Lindsay, pp. 91～92.

註㉗　「史淵」七十九輯、本稿（上）三五および三六ページ。Benser, G.: Zur Herausbildung der Eisenacher Partei. 1956. S. 28.

註㉘　一八六九年にはアウクスブルクにもいくつかの工場にストが起っている。「史淵」八十輯、本稿（中）四二ページ。なお一八六五年ブルク（Burg）市の繊維労働者がストをおこなっているが、ヒルシュ派である。七〇年代にベルリンの検事となった有名なテッセンドルフが当時この市の検事で、ヒルシュおよび二七七名の労働者を告発したが、裁判所では無罪となった。Cf. Eyck, E.: Der Vereinstag deutscher Arbeitervereine, 1863～1868. Ein Beitrag zur Entstehung der deutschen Arbeiterbewegung, Diss. Berlin 1904. S. 53.

（以上）

A list of documents on Japan in Livros das Monçoes Preserved by Archivo Torre do Tombo

by Kenji YANAI

Deutsche Arbeiterbewegung und die Fabrikarbeiter in den sechziger Jahren des. 19. Jahrhundert (Ⅲ: Ende)

von. E. KOBAYASHI

Über die Lage der Fabrikarbeiter in den sechziger Jahren gibt es überhaupt wenig Materialien. Als genauere Quelle haben wir "Krupp'sche Arbeiter-Familien. Entwicklung und Entwicklungs-Faktoren von drei Genarationen deutscher Arbeiter" (Bearbeitet von Richard Ehrenberg und Hugo Racine. Jena 1912). Danach erwarben damals die angelernten Maschinenbauer den höheren Lohn. Krupp liess angelernte Hammerschmiede, Schlosser, Dreher und Welzer von anderen Fabriken, sogar von Berliner Fabriken werben. Aber Berliner angelernte Arbeiter blieben nicht lange, weil in Krupp die Arbeit zu viel und der Lohn niedriger als in Berlin war. Hierin sehe ich die Ursache, warum die Berliner Maschinenbauer die sozialistische Arbeiter-bewegung bekämpften. Sie bildeten die sogenannte Arbeiter-aristokratie. Natürlich müssen wir andere Bedingungen, wie z. B. die Wohlfahrtseinrichtungen der Firmen, berücksichtigen.

Günter Benser weist darauf hin, dass man die Rolle der Fabrik-arbeiter in der damaligen deutschen Arbeiterbewegung nicht über schätzen soll, weil sie nur seit dem Ende der siebziger Jahre den Kern der Arbeiterbewegung bildeten. Das ist wahr. Andererseits aber sollen wir die Rolle der Fabrikarbeiter nicht unterschätzen. Zwar gesellten sie sich zu den Lassalleanern und Eisenachern nicht hinzu. Aber darum können wir nicht urteilen, dass sie die Gegensätze des Kapitalismus nicht fühlten und ihnen gar nicht widerstanden. Wir kennen ihre Kämpfe in Borsig (Berlin) und Lauenstein (Hamburg).

Der Lohnarbeiter fühlt sich stets durch das Kapital niedergedrückt. Er hat die Energie, den Druck zurückzudrängen, wenn ihre Existenz gefährdet wird. Wir könnten und müssten die Tatsache selbst, dass die Berliner Maschinenbauer die Anhänger der Hirsch-Dunckerschen Bewegung wurden, als eine Ausdrucksweise dieser Energie auffassen, Sonst werden wir den Grund nur oberflächlich verstehen können. warum die Fabrikarbeiter seit dem Ende der siebziger Jahre die Hauptträger der Arbeiterbewegung wurden.